

高知市市民活動サポートセンター季刊誌

えぬひい! Oh!

2014 冬
Vol. 58

▶2P

若者の献血率アップを目指して
～少しの勇気で人助け～

▶3P

高知大学 × 大学生協コラボ防災袋 CocoN~ ココン~
～みんなが助かる仕組みのデザイン～

▶4～5P

全国こどものまちサミット 2014 in こうち
～こどものまちから、一歩前へ～

▶6～7P

高知こどもの図書館 15 周年を迎えて
～預かりものを次世代に手渡す～



若者の献血率アップを目指して ～少しの勇気で人助け～

高知県学生献血クロス倶楽部（以下クロス倶楽部）。日本赤十字社と連携して、献血の広報活動に勤しむ高知の学生団体である。メンバーたちは年に10回ほどの献血推進キャンペーンイベントに合わせて活動を行っている。

メンバーたちの顔

クロス倶楽部のメンバーは高知県内の大学・専門学校に通う学生だ。意外にも所属学生のうち過半数は医療とは関係のない専攻の学生だという。

代表の大石有紗さん（高知大学人文学部3年）は献血について「医者でなくても看護師でなくても、

人助けはできる。献血はなんの資格もないらない、ほんの少しの勇気があればできる人助けです」と語る。



▶高知県学生献血クロス倶楽部
代表 大石有紗さん

献血のイメージ

献血の血液は事故等で大量失血した際に使うイメージが強いが、実際はがんや白血病といった病気の治療のために使われることが多い。特にがんは日本人の死因の三大要因ともなっていることを考えると決して他人事ではない。自分には関係ないと思っていても、い

つ自分自身や自分の大切な人が血液を必要とするかはわからない。

にもかかわらず、献血への理解度はまだまだ高いとは言えない。「献血は痛い、こわい」という先入観や、慈善活動に気恥ずかしさを感じる人が多いからではないだろうかと言われている。

クロス倶楽部ではそうした壁を払拭するために、献血がそれほど痛くないことを説明したり、イベント会場での声かけを行ったりなど、初めて献血をする人の勇気を後押ししている。

献血率向上を目指して

クロス倶楽部が特に力を入れているのが、彼らと同世代の若者の献血だ。若者の献血率は全体の約30%ほどだという。同じ若者同士だからこそ、その献血率の向上を目指している。

12月は献血率が下がるそう。そこで全国

の学生献血推進団体は一斉にクリスマス献血キャンペーンを行っている。期間

は12月1日

の31日まで

の1か月間

で高知県で

は6日、21

日、23日の

17時のイ



▲イベントには献血バスがやってきます



▲夏の献血イベントの様子

モール南コートでイベントを行う予定とのこと。イベントではクロス倶楽部のメンバーがサンタクロースやトナカイの仮装で献血を呼びかける。ぜひこれを機に、献血に協力してみてはいかがだろうか。

（高知大学人文学部4年 岡村沙和）



高知県学生献血クロス倶楽部
公式 facebook ページ
<https://www.facebook.com/CrossClub>

えぬびい!
Oh!

防災袋

CocoN
[ココン]

～みんなが助かる 仕組みのデザイン～

高知大学では学生・教員・職員・及び大学生協の有志による、高知大学オリジナル防災袋CocoNの製作・販売が行われている。

防災袋CocoNの名称の由来は、「南海トラフ地震に向けた暮らしの中の備え」の英語の頭文字をとったもので、CocoN(古今)という過去の経験を大切に、今の防災に活かすという意味も込められている。

きっかけは

高知大学の大概知史准教授は、東日本大震災のボランティアに行った際に、高齢者がダンボールの上などの劣悪な環境で寝ているのにショックを受けた。南海トラフ地震が起これば、高知大学でも同じような状況に陥ることが、そのとき准教授の脳裏をよぎったそうだ。

「学生の備蓄を促進し、防災への動機づけを行える防災袋を作りたい」と考え、メンバーを集めプロジェクトがスタートした。プロジェクトの役割は、防災袋を作ることにより、みんなが助かるための仕組みをデザインすることと位置づけた。

学生ならではの

38点の商品が入っている防災袋CocoNは、2つのことに配慮している。

1つ目は、学生の声を活かして作っていることだ。例えば、学生にとって必要不可欠な携帯電話の充電器を入れることは、早い段階からの決定事項であったそうだ。

また、メンバーの数田美樹さんの発案で、汎用性の高い大判の風呂敷やレジャーシート

が入っている。このような商品により、避難所で難しいとされる、プライベートの確保を行う狙いもある。

2つ目は、防災袋CocoNに親しんでもらうことだ。一例をあげると、一般的に敬遠されやすい取扱説明書を、オレンジを基調とした柔らかなデザインにしたそうだ。

目指すものは

「多くの人は、防災袋を持つべきであることは理解しているはずだ。しかし、『わかっている』と、『持っている』には大きな隔たがある。そのハードルを、防災袋を作ることにより越えていけるものになりたい」とメンバーは口々に語る。具体的には、高知大学に入学すれば、防災袋を持つのが当たり前の環境にしたい。それが、多くの人の命を守るという、一番の



▲商品



▲防災袋CocoN お渡し講習会

CocoNの由来

「Considerations in daily life for
Coping with
Nankai trough earthquake」

「南海トラフ地震に向けた
暮らしの中の備え」

▶取扱説明書



目的につながると意気込んでいる。高知に住む以上、南海トラフ地震の脅威にさらされていることは間違いないだろう。自分も含めて一人一人が当事者意識を持ち、準備を進めていきたい。

(高知大学人文学部2年 野藤寛樹)

全国こどものまちサミット2014 inこうち

～こどものまちから、一步前へ～

8月16日(土)と17日(日)の両日、高知市文化プラザかるぼーとを会場に、北は岩手県から西は長崎県まで全国各地から160名が集結し「全国こどものまちサミット2014 inこうち」が開催された。

このサミットは、2007年に千葉県佐倉市で始まり、以降^{※1}「こどものまち」を主催する団体が持ち回りで開催している。今回は、「こどものチカラ^{※2}信じよう」をキーワードに、高知市が主催し、NPO高知市民会議が実行委員会形式で企画・実施した。「こどものまち」を主催する団体やこれから開催したいと思っている人々が一堂に会し、「こどものまち」の情報交換や同日かるぼーとで開催されていた^{※3}とさつ子タウン^{※4}の特別視察等を行った。

こどもの社会参画

初日は、ドイツのミュンヘン市特別職「こどもの参画専門員」のヤーナ・フレードリッヒさんが、「こどもには権利がある」と題して基調講演を行い、^{※3}「ミニ・ミュンヘン」や^{※4}「こども・青年フォーラム」を事例に、こどもの社会参画がこどもの市民意識の向上につながるだけでなく、こどもの目線で社会を捉えることができる人々にとつて優しい社

会をつくることにつながると訴えた。

続いて、「こどものまちから一步先へ!」と題して、パネルディスカッションが行われた。早稲田大学の卯月盛夫教授がコーディネーターを務め、ヤーナさんの他にこうちこどもファンクラブアドバイザーの畠中洋行さんや高知市の吉岡章副市長も加わり、「とさつ子タウン」や^{※5}「こうちこどもファンクラブ」の事例を紹介しながら、こどもの社会参画について話し合いがなされた。

続く、つながる「こどものまち」

その後、①「こどものまち」を支えるしくみ②保護者からみた「こどものまち」③学生にとつての「こどものまち」をテーマに分科会で意見交換が行われ、夜には、高知の食を囲み、親交を深めた。

二日目は、午前中全国から参加したこどもや「こどものまち」学生メンバーによる「こども会議」が開催され、運営の違いや自分のまちの自慢できるところ等が話し合われ、「こどものまちって何のためにやっているの」「大人とこどもの境はいくつ」などのテーマで多くの意見交換がなされた。

サミットの終わりに、次回開催地である静岡市への横断幕受け渡しが行われた。

参加者の声

多くの参加者の中から、3名の方の声を紹介します。

【仙台市から参加した唐橋裕美さん】

「ヤーナさんの話がとてもよかったです。日本のこどものまちは、『楽しむ』という点が大きいけれど、リアルな社会への参画について考えていて、ドイツは日本より進んでいますね」

【相模原市から参加した大田笑美さん】

「高知は大学生の参加が多いです。(相模原でも)もっと、まちの特色を出し、専門家の人たちが

参加してくれるようにしたいです」

【ヤーナ・フレードリッヒさん(講師)】

「(日本・高知のこどもたちに対して)健やかに育ってください」

「日本・高知の「こどものまち」主催者に対して」こどもたちが十分な保護を受けられ、こどもの権利が守られるように、皆さんの手でできる可能性が高いところから始めてください。こどもの言葉には大人が大切にすべきことが散りばめられています」

やいばに

今回のサミットは、「こどものまち」の主催者がその開催について意見交換を行う場から、「こどものまち」の意義を考え一緒に仲間を増やす場、実社会とのつながりを考える場にステップアップできたと感じている。

次回開催地の静岡市は、一年中週末ごとに「こどものまち」を開催し、他の「こどものまち」とは異なる形態で実施されている。新たな切口でのサミットの展開が期待される。

(森岡)



▲会場全景



▲ヤーナさんの講演



▲サミットのために特別に設けられたとさつ子タウン特別視察ツアー

えぬびい!
Oh!

▶ファイナル集合写真



▶第1・2・3分科会



▲こども会議登壇者とヤーナさん

▼こども会議



【用語説明】

*1 「こどものまち」

日本初の「ミニさくら」をはじめとする、日本で開催される、こどもが働き遊ぶ、こどもが主役の仮想のまち。

こどもの居場所として開催されているものの他、商店街活性化と結びついて展開しているもの、地域通貨や経済を学ぶ一環として行われているもの、政治や社会の仕組みを知り、関心を持つためのもの等、様々な方式で開催されている。主催団体も、NPO や行政など様々。

(ミニ・ミュンヘン研究会 HP から引用)

*2 「とさっ子タウン」

ミニ・ミュンヘンを手本に、NPO 高知市民会議が中心がとなって実行委員会形式で企画実施し 2009 年から開催しているこどもたちが運営する仮想のまち。約 400 人のこどもたちが様々な職業や消費、納税等を通して、まちの仕組みを学ぶ。対象は小4から中3までのこども。

まちの中では就業の他に起業も可能で、市長選挙や議会選挙もありまちの仕組みをこどもたちが変えていくことができる。

*3 「ミニ・ミュンヘン」

ドイツ連邦共和国バイエルン州の首都ミュンヘン市で2年に1度夏休みに3週間だけ開催される 30 年以上続くこどもがつくるまち。この事業に関わる大人たちはプロ・マイスター。こどもたちは、この街の中の店や工房で働き、大学に通い、自らが政治を行う。地域通貨を稼いで、食事をしたり、土地を買って家を建てることもできる。こどもたちはそこで、人との関わり、社会に参加する喜びや責任を学んでいく。

*4 「こども・青少年フォーラム」

年に2回、4月と11月にミュンヘン市議会本会議場で、18才までのこどもたちが「身の回りの環境をこう改善したい!」という提案を行う。

参加したこどもたちの議論と多数決で提案が可決されると、同席している市役所と市議会の各党の担当者が決められ、1年以内にその提案を実施(できない場合は理由を付して回答)しなければならないという仕組み。

(ミニ・ミュンヘン研究会 HP から引用)

*5 「こうちこどもファンド」

未来の高知市を担うこどもたちの『自分たちのまちを良くしたい』という想いを実現するために、高知市が「高知市こどもまちづくり基金」を積み立て、その基金を原資としてこどもたちの自発的な活動を支援する制度。

こどもたちの提案を助成対象とするだけでなく、審査する側にもこどもたちが参加する、全国の自治体に先駆けた取り組み。

こどもたちが自主的に提案・行動するまちづくり活動への助成を通して、自分たちが普段生活している「まち」を見直す機会を提供するとともに

高知こどもの図書館15周年を迎えて

～預かりものを次世代に手渡す～

カタチある本が持つ魅力

独特の匂い、ページをめくる所作、手触りと質感、重量感、ぶ厚い本を踏破した達成感、表紙やタイトルデザイン・カバー等の装丁、本棚にしまう、カタチある本だけが持つ独特の魅力。近ごろの電子書籍にはない。

そんな魅力や夢がいつぱい詰まったカタチある本でこどもたちに寄りそう図書館、それが「高知こどもの図書館」だ。運営は、認定NPO法人高知こどもの図書館”。

高知こどもの図書館1

1970年代「こども文庫」、「こどもの本の読書会」が広がり、1980年代「こどもの本を語る高知大会を開催（その後、実行委員会形式で2000年代まで15回開催）。1990年代「高知こどもの図書館をつくる会」が発足。1999年「高知こどもの図書館」開館、現在に至る。

「高知こどもの図書館」は、絵本はもちろんのこと、児童文学に関する研究書や中高校生の読み物などの貸し出しから、読書案内、読み聞かせ、ブックトーク、情報の収集と発信、そして、あとろえほん（ミニギャラリー&集いの場）の運営など、多彩な企画と自由空間を提供しながら、本と人をつなぐ場、人と人をつなぐ場として、こどもの本に心を寄せるすべての人々が望む読書環境づくりを提供する稀有な図書館である。

NPOが運営するこ

の図書館は、施設は高知県から無償提供されているものの、公的な資金援助は全く受けず、人件費をはじめ、図書購入費、その他の運営に関わるすべての



経費は、会費や寄付金、助成金、自主事業収入で支えている。この限られた運営費のなかで、スタッフたちはこどもたちの読書環境を少しでもよくしようと、日々努力を重ねている。ここで書き記すのもどうかと思うが、あえて言わせてもらえば後にも先にも運営資金確保が最大の課題なのである。読者の方へ、ぜひ寄付や協賛金の提供をお願いしたいものである。

5周年を迎えて 古川佳代子館長に聞く！

さて、本題に入りたい。「高知こどもの図書館」は、今年15年目を迎えた。喜ばしい限りである。認定NPO法人高知こども図書館”では、さらなる飛躍を目指して、様々な魅力的なイベントや催しが開かれている。

筆者は、高知こどもの図書館館長でもあり、認定NPO法人高知こども図書館理事でもある古川佳代子氏に話を伺った。

『高知こどもの図書館は15周年を迎えましたが、もちろん到達点ではなく、でも通過点でもなく、この15年という年をひとつの区切りとしてスタッフすべての心を新たにすると考えています。今まで多くの諸先輩が支えて築いてきた「高知こどもの図書館」ですが、この大切な預かりものを次世代の人たちに手渡すことが、今のわたしたちの与えられた役目と考えています。ただ手渡すのではなく、こどもへの愛がいつぱい詰まった揺るぎないしくみと安定した財政基盤をしっかりと整えながら、確実に手渡すことが肝要と思っています。さらに、昨今、こどもを取り巻く環境が厳しい中、無条件で大人を信頼できる場所が少なくなっています。この図書館だけはこどもが安心して大人と出会える居心地のいい、ホッとする場所でありたいと考えます。財政状況は厳しいですが、かつて図書館に通ったこどもたちが社会人になり、会員



長谷川義史 絵本ライブ



筆者は 15 周年のイベントの一つ、県民文化ホール（グリーンホール）で行われた長谷川義史の絵本ライブに出かけてきた。

“長谷川義史”、どうやらその世界では大人気の絵本作家らしくて、東京や大阪などではいつも満場になるのだそうだ。高知でははじめてのライブということもあり、この日は大盛況、開演前にすでに満席に。

大型スクリーンを使つての絵本の読み聞かせにはじまり、ウクレレ演奏や会場参加型の即興絵本づくりなど、楽しい演目が続き、冷めて観ていた筆者もいつのまにかどっぴりと長谷川マジックに魅了され、長谷川ワールドに取り込まれる。あっという間の 1 時間半だ。

もちろんこどもは夢中になり、大人も背を浮かせ前のめりになり、こどもに抱きつきながらいっしょに夢中になっていく。後半部は、こども以上に大人が楽しむ事態となり恍惚状態となり、親子が一つに、そして会場と長谷川氏が一つになって弾ける。高知こどもの図書館の仕掛けたマジックにだれもが落ちていく。したり顔の図書館スタッフたちが憎らしい。



▲古川佳代子館長



になって支えてくれています。応援してくれる人たちのためにも、知恵を出して仲間や会員を増やし、次世代に手渡していきたいと日々、研鑽しています。『いやはや参りました。頭が下がるばかりだ。』

高知こどもの図書館 2

しばらく古川佳代子館長に話を聞いた後、館内の様子を伺う。

一組の親子が来館。しばし観察する。しばらくして、こどもが書架から何冊か絵本を取り出して一心不乱に読み始める。いや、見始める。どうやらまだ字が読めないらしい。お母さんが静かに寄り添い、親子でその場に座り込み、お母さんの読み聞かせが始める。親子が本の世界に飛び込んだ瞬間だ。そこには心地よい緊張感と、でも張りつめることのない、ほどよい静かな空気が親子を包むのを感じる。いつのまにか学びの空間が広がり、いつのまにか二人がひとつになり、いつのまにか夢が舞い、いつのまにか未来が降臨し、いつのまにかそれに手を伸ばしている親子・・・そんな幻を見た気分になる。筆者が思うところ、このようなすてきな場をすべてのこどもたちに提供しながら、こどもたちのあらゆる可能性への架け橋となり、未来を拓くための仕掛けを施す、これこそが高知こどもの図書館の理念なのだと思手に確信する。

やういひ

まだ、高知こどもの図書館を体験したことのない方がいらしたら、ぜひ出掛けてほしい。

(しのみや)

高知弁クイズ第2弾！

最近よく聞くカタカナ語を高知弁に訳してみました。
うまくつながるでしょうか？

問1

高知弁：いつまでやち
続けたいがよ



コンプライアンス

問2



高知弁：たいちゃー
いろんな関係者

サステナブル

問3

高知弁：こじゃんと
やりきりたいこと



ファンドレイジング

問5



高知弁：法律や倫理や
道徳らあを
守ることながちや

ステークホルダー

問4

高知弁：NPO らあが資金を
集めることながよ



ミッション

答えは高知市市民活動サポートセンターのホームページに掲載中。
URL：<http://www.kochi-saposen.net/>

高知弁訳：たいけ まり 大家真理さん
クイズ制作：NPO 高知市民会議広報部会

#編集スタッフの

つぶやき



@のむ

人はひどい仕打ちを受け心に傷を負うことがあっても、その痛みを忘れる。天災は忘れた頃に！自然に謙虚であれ！



@大野

最近、移住したいという人によく会います。歓迎には美味しい食べ物とお酒。住処を移すほど気に入ってもらえるって嬉しいですね♪



@藤田

先日、高校の同級生に会った。卒業以来の再会でお互い話が尽きず、気が付けば朝を迎えていた。また会えたらいいな。



@いわさだ

同級生が次々と老眼鏡愛好者になって行く中でなんとか現状維持で頑張ってますが、住宅地図は無理！ルーペのお世話になってます。



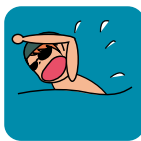
@横田

新米に栗、秋刀魚…。福を呼ぶといわれる初物は買う前にいただくことが多い。初物にも下さった方にも感謝して食べる。幸せ2倍。



@山崎

夏休みも終わり一気に秋に。黒くて平たくて速い生き物も徐々にいなくなり、どこに居ても快適です。



@あおき

ここ半年、息子と週2日水泳に通っている。二人ともずっと風邪を引かないのは、体が強くなったため？適度な塩素消毒のため？